

トルコの表紙装釘について⁽¹⁾

ケマル・チュウ

私は本論に於て、トルコの表紙装釘芸術の特長、及び各時代に見られるそれぞれの特長性についてのべたいと思ふのであるが、それに入る前に、西アジアに一般的に行はれた表紙装釘の歴史を簡単にみておいた方が便宜かと思ふ。中世初期に於て、表紙装釘技術がエジプトと東トルキスタン、中でもウイグル居住地域に知られてゐたことは、今日では確実に証明されてゐる。⁽²⁾ トウルファン遺跡の発掘団長だつたアー・フォン・ルコック (A. von Le Coq) は、高昌で行つた発掘で、表紙の断片二片を発見したのであるが、種々の可能性から考へて、これらの断片が、六世紀から九世紀にかけてのものでなければならぬこと、また同時に、その上に施された装飾モチーフがエジプトのコプト人 (Coptes) が表紙に施したそれと極めて密接な親縁関係にあることを明らかにした。⁽³⁾ ベルリンのパピルスコレクション中に保存されてゐるイスラーム化以前のエジプトのコプト人の表紙を研究したエフ・サルレ (F. Sarré) も同じ結論に達してゐる。これらの説を覆す学説は今日までにまだあらはれてゐないのであつて、このことから我々は、西アジアに於る表紙装釘技術の起源は、エジプトのコプト人のそれにあつたと考へねばならない。このエジプトのコプト人に於る表紙装釘技術は、イスラーム化以前に、はじめてネストル教徒たちの手で中央アジアへ齎らされ、イスラーム時代にもひきつづき行はれてゐたのであるが、ついで、アラビア人の手によつて、宗教書とともに、トルキスタン、イラン地方に、第二次的な影響をあたへたのである。たゞ、西アジアの表紙装釘に関する研究はそれほど多いとはいへぬ現状なので、その発展史を一步一步完全に跡づけることは今日不可能といはざるを得ない。

トルコの表紙装釘について ケマル・チュウ

るをえない。しかし、つぎのことだけはわかつてゐる。すなはち、聖遷^{ヘジラ}の暫く後、木の板の上に皮革をかぶせただけでその上に何も塗らず、 \wedge キョルアーレット(*kör ale*) \vee (直訳すると、「なまくら道具」)とよばれる鉄製押型で、極めて簡単な幾何学模様を押しつけたものが、羊皮紙に書いたコーランの表紙として使はれてゐたのである。⁽⁴⁾その後、木の板の代りに厚紙が用ひられると、細工が容易になつたので、模様が豊かになつた。つまり、幾何学模様の間に、もつとこまかい裝飾、模様を沢山つけるやうになつたのである。表紙が更に、人を惹きつける美しさをもつに至つたのは、実にこのために外ならない。

以下、本論に於て、特にオスマン時代のトルコ人の装釘した表紙についてのべようと思ふ。といふのは、セルジューク時代や、またその後の所謂「小土侯国分立時代」に於ては、アラビア・イラン・アナトリアで装釘された表紙が、技術・模様がらみて大体相似てゐて、その間、はつきりした区別はつけられないのに對して、一五世紀以後になると、イスラーム圏内の諸民族、諸国家のそれに於て、民族的な好み、特長が次第にはつきりあらはれてくるからである。

ところで、トルコの表紙装釘にあらはれた各時代の特長をのべる前に、表紙を装釘するのに使はれる主要な材料、一枚の表紙を構成してゐる各部分、その上に施された模様、その模様をつけるのに用ひられる道具などについて一言しておかうと思ふ。その方が、本題の理解により便宜かと考へられるからである。

トルコ語で表紙装釘のことを \wedge シルト(*çilt*) \vee といふが、これは元来アラビア語で「皮革」を意味する。これによつてもわかるやうに、表紙の主要な材料は皮革であつて、すぐれた表紙がつくられるか否かは、一に、望み通りの質、色の皮革が入手できるか否かにかゝつてゐる。皮革を鞣す技術が、西アジアで非常に古くから發展してゐたことは周知の事実であるが、西アジアの表紙装釘技術が、西洋のそれに比べて非常に進歩した理由の一つはこゝに在るわけである。今日なほ、イス

タンブルの「トプカプ＝サライ博物館 (Topkapı Sarayı Müzesi)」と「トルコ＝イスラーム遺物博物館 (Türk-İslâm Eserleri Müzesi)」には、一二世紀から一四世紀に至るセルジューク時代の皮革製表紙が数多く保存されてゐるが、そこに用ひられた皮革は、鞣す技術がすでにその時代に、トルコ人の手によつて、ほど完成されてゐたことを示してゐる。オスマン＝トルコ時代に入ると、特に一六世紀に、皮革を鞣す技術はまた大進歩をとげ、表紙装釘に何よりも必要な山羊皮、またそれほどは使はれないが羊皮の、種々様々の色合ひをした美しいものが、コンヤ (Konya) をはじめとするオスマン帝国諸都市でつくられたのである。このやうに、表紙装釘は、それに一番重要な材料である皮革を鞣す技術が非常に発達した当然の結果として、トルコに於る特殊な、また、重要な芸術部門となるに至つたのである。

表紙に用ひられる第二の材料は厚紙である。上述のやうに、初期に装釘されたものでは木の板が使はれてゐたのであるが、そのうち、板の代りに厚紙が用ひられはじめると、表紙に施す模様に於ても、一つの発展が見られるやうになつた。いふまでもなく、これは、厚紙の細工が、木の板のそれに比べて容易であつたからであつて、それ以後、専ら厚紙が使用されてきたのである。

表紙用の厚紙はつぎのやうにしてつくられた。まづ第一に、何枚かの紙を、上にくる紙の方向が、その下の紙の方向に交叉するやうに、望みの厚さになるまではりつける。そしてその際、糊の中には、書物と表紙とに虫がつかぬやうに、殺虫剤を入れるのが普通であつた。⁽⁶⁾ かうしてつくられた厚紙の上に、重しをかけて乾かすのであるが、さうすると、恰かも木の板のやうに、どれだけ時が経つても、決して形の崩れない、堅くてしつかりした厚紙が得られるのである。

一枚の表紙はつぎの四つの部分から成つてゐる。つまり、

(1) 上表紙と裏表紙。

トルコの表紙装釘について ケマル＝チユー

(2) 背中の部分。

(3) 書物の前部をおほふ、表紙の左の部分。これは「ミクレプ (Miklep)」とよばれるが、その端は大体に於て三角形で、書物の間にはさまれるやうになつてゐる。

(4) 「ミクレプ」と表紙とをつないでゐる部分。これは「セルタープ (Setâp)」とよばれ、「ミクレプ」が自由に動くやうにしてゐる。

つぎに表紙に施される模様について一言しよう。皮革表紙につけられる模様は、表紙の外側のものと内側のものとに分けられる。外側には、多くの場合、真中に、「シエムセ (Sense)」とよばれる楕円形の飾りがある。これは、セルジュク時代および一五世紀のオスマン時代の表紙では大体に於て円形のものが多いが、一六世紀以後のものになると楕円形になる。この真中の「シエムセ」の両端が長くなつて装飾化されると、これは、「サルベクリ＝シエムセ (Salbekii Sense)」つまり「サルベクのついたシエムセ」とよばれる。また表紙の四隅に施された装飾を「コシエベント (Kosebent)」とよんでゐる。トルコの表紙では、真中の「シエムセ」と四隅の「コシエベント」との間は、イランのそれに於るやうに模様は施されないで、空白のままに残されるのが普通であつた。きはめて例外的に、一六世紀に装釘された表紙の或るものでは、この部分にも模様があるが、この場合には、「ミイレムマ＝シエムセ (Milemma Sense)」つまり「飾りたてられたシエムセ」とよばれてゐる。また、表紙の外縁を囲む部分を「ボルドゥル (Bordür)」と、そしてこの「ボルドゥル」の上に、円形とか楕円形の小装飾が施されると、これらを「カルトゥシュ (Kartuş)」とか「パフタ (Pafat)」とかいふのである。表紙の内側には、薄く削つた皮革を、何の模様もつけずに平らのまゝではりつけたものもないではない。しかし、多くの場合、内側にも模様を施するのが普通であつた。セルジュク時代では、内側の装飾には、焼いた鉄型を押しつけて、簡単な模様をつけるの

が通例であつたが、一五世紀以後のトルコの表紙では、一般的に、内側に「シエムセ」と「コシェベント」とを彫り込むか、或ひは表側と同じやうに浮出させるか、何れかによつて施してゐる。きはめて稀にはあるが、トルコの表紙のなかには、その内側に、金箔を塗つた、「ハルキール(Halkar)」とよばれる模様をもつものもある。

表紙の模様は、つぎのやうにして、浮彫りにされた。前述のやうに、表紙用にはり合はされた厚紙を、まづ、望みの大きさに切りとり、その上へ、それより薄い厚紙の、模様のところを切り込んだものをはりつけ、それに、非常に濃い糊を厚く塗りつけ、さらにその上へ、今度は、薄く削つた皮革をそつとはりつける。そして、それぞれの好みに応じてあらかじめ造つておいた模様の「型」^{かた}を、上述の切りこまれた箇所**に強く押しつける**と、その糊だけが押しつけられ、望みの模様が浮彫りになつてあらはれるのである。この浮彫模様が厚くてシャープであればあるほど、立派な細工といふことになる。また別の方法として、模様を施す箇所の皮革を厚紙と一緒に切りこみ、そこへ浮出し模様のあるほかの皮革をはりつけることも行はれたが、これは、「ムメ＝シエムセ (Göme Sense)」つまり「埋めこみシエムセ」といはれる。また、「型」を、表紙に何も塗りつけたりはりつけたりせず、直接押しつけて模様を施すこともあるが、この場合には、「ソウク＝シエムセ (Soguk Sense)」つまり「冷たいシエムセ」とよばれる。一五世紀に至るまで、あらゆるイスラーム国家に於て、表紙の模様は以上のやうにしてつけられたのである。

その模様を施すのに使はれた「型」は、はじめのうちは、鉄製か木製かであつたけれども、これらは、押しつける際に、皮革を傷めたり破いたりするので、その代りに、硬くした皮革が用ひられるやうになつた。そしてこの皮革製の「型」には、特に駱駝の皮革が好んで使はれてゐる。

この「型」をつくるには、まづ、薄く削つた皮革片を、浮出しにする模様の大きさに切りとり、「チリシエ (çirîs)」とい

ふ特殊の糊で何枚もはりつけて、大体三センチメートル位の厚さにするのであるが、それが乾くと、丁度木の板のやうに硬くなる。それから「ムシュタ(musta)」といふ鉄の道具でたゞいてもつと密着させ、薄くしたこの皮革の板の上へ、模様を線描きにして彫刻師にわたす。彫刻師はそこで、その皮革板の上に描かれた、浮彫りになる部分を彫り込むのである。⁽⁷⁾このやうにしてつくられた「型」は、非常に耐久力が強くて長期の使用に耐へ、親方から徒弟へとうけつがれて使はれたのである。かうした「型」によつて施された模様は、大体似たりよつたりなのが多いのも、実はこのためと考へられる。

以上我々は、一般的に、西アジア諸民族に於て装釘された表紙の、きはめて簡単な歴史、その材料、技術などについて大雑把にのべてきたのであるが、つぎに本題に入つて、一五世紀以来今日に至るまでのトルコの表紙装釘に見られる特長を、各世紀ごとに見ていくことにしたい。

一五世紀に装釘されたトルコの表紙の、最も多く、また最もすぐれた例は、ファアティフⅡスルタンⅡメフメット(Mehmet II Sultan Mehmet)、つまり、学問・芸術を非常に保護しただけでなく、自身も学者、詩人だつたメフメット征服王のためにつくられた書物に、これを見ることが出来る。これら、トルコで装釘された表紙を、同世紀に於る、ほかのイスラーム諸国のそれと比較研究してみると、まだ、この時代には、トルコの表紙に独特な特長を、それほど見ることはできない。それでは、トルコの表紙にはかの諸国のものと異つた点が全くないのか、といふと、さうはいへないのである。エルメナクⅡサキズヤン(Ermenak Sakizyan)は、この点に關して、あらゆるイスラーム諸国に於て、一五世紀に装釘された表紙は、すべての点からみて全く同一で、「一五世紀には、トルコ民族に独特、固有の表紙は見られない」といふ見解を発表してゐる。⁽⁸⁾この説は、卑見によれば、誤りである。なるほど、この世紀に於ては、あらゆるイスラーム諸国の表紙装釘は、技術といふ点では全く同一である。しかし、その模様に使はれたモチーフと構図とには、民族による好みのちがひがはつきりあ

らはれてゐるのであつて、このことは、上のサキズヤン説を否定する重要な証拠といはざるを得ないのである。例へば、一五世紀のヘラットの表紙では、模様のモティーフとして様式化された植物模様、花模様とともに、景色と生物とのモティーフが使はれてゐるし、メムルーク (Memluk)、セルジュクに於るそれでもまた、様式化されたモティーフと並んで、アラベスク模様が用ひられてゐる。これに對して、オスマン・トルコ地域、中でもイスタンブルで装釘されたものでは、無生物の様式化されたモティーフ以外は存在せず、三葉の木の葉、つばみ、「ルーミー (rumi)」とよばれる入り組んだ模様、水蓮、天竺葵の葉、雲、ばら、五葉の木の葉、「ハターイー (hatai)」といはれる特殊な、これまた入り組んだ模様、釘先のやうな模様そのほかが使はれてゐて、景色とかアラベスク、また生物モティーフは全く見られないのである。そして、これらの模様の構図は、あらゆるイスラーム諸国に大体共通してゐて、何れも「シェムセ」、「サルベク」、「コシェベント」、「ボルドゥル」をもつてはゐるが、そのこまかい配置に於ては、トルコの表紙には、ほかの諸民族のものには全く見られない特殊な好みがつきりあらはれてゐるのである。以上は、表紙の外側の模様についてのべたのであるが、内側のそれについても、いくつかのトルコ的な特長がみられる。イラン地域で装釘された表紙の内側に彫りこまれた模様が細くて、その上、地がいろいろの色でいろどられてゐるのに對して、トルコのそれは大体に於て、太くて、たゞ真中のメダル様の模様しかないのが普通である。また或るものでは、同様に太く彫られた「コシェベント」もみられる。その上、地は単色か、多くても二色である (第一図)。また、表紙の外側の模様の皮革の色を變へただけで、同じ模様が内側でも繰りかへされたものもある (第二図、外側)。オスマン・トルコは、ファティフ以後、政治的に非常に強盛になつたのであるが、これは芸術の分野にもあらはれ、一五世紀の末ごろになると、表紙装釘にも、大きい発展がみられるやうになつてきた。

つぎに一六世紀に入ると、この世紀は、トルコの政治史に於ると同じやうに、芸術活動の点からみても、さらに重要な時

代であつた。中でも、カヌーニー＝スルタン＝スレイマン (Kanuni Sultan Süleyman) の治世には、ほかのすべての領域に於ると同じく、表紙装釘芸術に於ても、大進歩がみられた。特に、スルタンの宮廷おかへ製本師だつたメフメット＝チュレビ (Mehmet Çelebi) ʼ その同族のスレイマン＝チュレビ (Süleyman Çelebi) ʼ ムスタファ＝チュレビ (Mustafa Çelebi) のやうな、きはめてすぐれた芸術家たちの手によつて、非常に麗はしい、上品な、そしてほかに例のないやうな表紙が装釘されて、同時代のほかのどの民族、国家に於る表紙も、それらに比べるとその光輝を喪ふほどであつた。すでにその当時、この問題について論じたアリー (Ali) は、表紙装釘が盛に行はれた一六世紀の後半以後、この分野に於て、トルコとイランとはたがひに競争状態に在つたことをのべ、つづいて、「カヌーニーおかへ製の本師だつたメフメット＝チュレビにならぶと、そのデリケートさに於て、どのイランの製本師たちも比べものにはならない。イランの製本師たちが、金でぬりつづし、個々の部分を飾るといふ点では、実に巧みであつたことは否定できないけれども、トルコの製本師たちは、そのものした粋飾り、鎖飾り、そして装釘のデリケートさ、上品さといふ点では、イランのものはるかにぬきんでゐる」といひ、さらに、当時のイランに於る著名な製本師、ミル＝フセイン＝カズヴィニー (Mir Hüseyin Kazvini) ʼ カスィム＝ビン＝テブリズィー (Kasim bin Tebrizi) ʼ ミルザ＝ビン＝テブリズィー (Mirza bin Tebrizi) ʼ メフメット＝ザマン＝テブリズィー (Mehmet Zaman Tebrizi) ʼ モンラ＝カスィム＝アリ (Monla Kasim Ali) たちも、トルコのメフメット＝チュレビなどと比べると、そのそばへもよれず、この点については、議論の余地は全くないといふ結論に達してゐる。⁽⁹⁾

製本師たちがこの世紀になつてはじめて一つの団体をつくつたことが、文献からわかつてゐる。

この時代のトルコの表紙は、イランのそれとは非常に異つた、いろんな特長をもつてゐる。まづ第一に、トルコの表紙では、その全面に金箔を塗ることはしないのであつて、模様を施される部分と、その上の浮彫りとが、黄色、緑色に塗られる

か、ただ浮彫りの箇所だけに塗られるか(第三図)だけで、地は、皮革自身の色のままなのである。トルコの表紙が、簡素な美しさをもつてゐるのは、実に、このやうに、金箔が適度に使はれてゐるからである。これに対してイランの表紙に於ては、金箔が地にもその上の浮彫り模様にもビッシリ塗られてゐるので、豪華な観は与へはするものの、トルコの好みに比べるゝと、上品とはいへないのである。つぎに、トルコの装釘では、真中の飾り、「シエムセ」は、十五世紀に於ては、楕円形や円形で、中には、山型の切込みのあるものもあつたが、一六世紀に入ると、全部楕円形となり、しかもその両端に「サルベク」がつくやうになる(第四図)。また外縁の囲みの部分には「カルトゥッシュ」が施されるに至つたが、同時代のイランのものにはこれを見ることができない。さらに、模様のモチーフとしては、一五世紀に使はれたものに加へて、石榴の花、六瓣の花、虎の皮のやうなすじ模様、斑点模様、そして特にギザギザのある木の葉が用ひられるに至つた。この、最後に挙げた、ギザギザつきの木の葉模様は、イランの表紙では、一七世紀になつてはじめて見られるものである。

一六世紀の表紙に関して、どうしても触れざるを得ない、もう一つの装釘技術がある。それは、厚紙の上に、皮革ではなくて布をかぶせたもので、その布には、皮革表紙に施されたのと全く同じ模様が、金糸で刺繍されてゐる。

ついで一七世紀になると、恰も当時の政治的情勢を反映するかの如く、その皮革表紙装釘芸術には、一つの後退が見られる。技術的には何の変化もないけれども、模様のつけかたと構図とに於て、顕著な後退が目につくのである。多くの表紙から、「コシイベント」と「ボルドゥル」とが姿を消し、その代りに、両端と両側とが突き出た、長方形の、大きい「シエムセ」が、ただそれだけで、模様として使用されてゐる。また或るものでは、楕円形の「シエムセ」が施され、外縁の「ボルドゥル」の代りに、比較的太い「鎖模様」がつけられてゐる。古典的、伝統的構図を保存してゐるものに於ても、「サルベク」が大きくなつて、一六世紀のものに見られる如き、上品さ、優雅さを喪つてしまつた。しかしながら、同時代のイランの表

紙では、「サルベク」は「シエムセ」から全く切りはなされて、独立したものとなつたため、表紙上の構図の平衡が喪はれ、趣味の悪いものとなつてしまつたけれども、トルコのそれでは、どの時代に於ても、かういふことはなかつたのである。

つぎに一八世紀に於るトルコの皮革表紙について一言しよう。この世紀に於ても、古典的、伝統的な装釘技術は依然つづいて行はれ、特に、アフメット三世 (Ahmet III, 1703—1730) 治世には、実に立派な作品が生れるに至つた。第五図はその一例である。しかし、この世紀には、その前半から、ほかのタイプ、技術による表紙装釘も行はれるやうになつた。それはつぎの四種に大別できる。すなはち、

- (1) 「ワニス」を塗つて装釘された表紙。これについては、あとで別にのべることにする。
- (2) 写実的モチーフの模様を施した表紙。この種の表紙は、技術的にみると、さらに二つに分けられる。つまり、
 - (a) 模様を、皮革の上へ、刺繍によつて施したもの。
 - (b) 技術も構図も、ともに古典的、伝統的であるが、模様のモチーフが写実的なもの (第六図)。
- (3) 金箔を塗つた皮革の地に、鉄型を押しつけて模様を施した表紙。これは「イエクシャハ (Yekshah)」とよばれるが、これは、古典的、伝統的表紙と、ただその技術が異つてゐるだけで、その模様のモチーフに於ては全く同じく、様式化された花模様、植物模様がつかはれてゐる (第七図)。

- (4) 一八世紀の後半以後、特にヨーロッパの影響によつて生れた「ロココ」式模様をもつ表紙。

さらに、この世紀に装釘されたもう一つのタイプの表紙がある。第八図がそれであるが、これは、技術からみても、模様のモチーフからみても、古典的、伝統的な表紙と全く同じであるが、ただ、その「シエムセ」の形や全体の構図が、従来

のものとは全然異つてゐるのである。

つぎに、一九世紀—二〇世紀の皮革表紙についてのべよう。この時期に於ても、古典的、伝統的な装釘はひきつづいて行はれたけれども、それには、すぐれた作品は存在しない。一九世紀には、それよりも、一八世紀の「鉄型押しつけ」技術による表紙（上述の(3)）と「ロココ」式表紙（上述の(4)）とが数多くつくられはじめたのであつて、この新しい装釘技術は、つひに、古典的、伝統的表紙との結びつきを、完全に絶ちきつてしまつたのである。

この時代には、オスマン帝国を襲つた内憂外患が、芸術や芸術作品に対する人々の関心を喪はせたので、共和国宣言に至るまで、あらゆる芸術分野に、いはば虚脱時代がつづいた。しかし、共和国の宣言とともに再び我れにかへり、光輝ある過去に思ひを致したトルコの若きジェネレーションは、数多くの意義ある事業の中でも、特に、来しかた遙け祖先から残された、そして偉大なる歴史をまのあたり示す、すばらしい芸術作品に、再び生命^{いのち}をふきこみはじめたのである。表紙装釘芸術もその例外ではなく、その成果がしだいにみのりはじめてゐる。⁽¹⁰⁾

トルコの、「ワニス塗り」技術による表紙にうつる前に、もう一つのタイプの表紙について一言しておきたい。それは、一六世紀、つまりオスマン帝国が一番豊かで一番栄えてゐたときにつくられたものであつて、その構図は、古典的、伝統的皮革表紙に於ると全く同じであるが、ただ、材料として、厚紙と皮革との代りに金、銀が、そして模様としてダイアモンド、真珠、ルビー、エメラルドの様な宝石がちりばめられてゐる。これらはスルタン、高官、富裕者のためにつくられたものである。しかしこれらを、また独立した資料として見てみると、はじめは単に書物を保護する必要だけからつくられたものが、人間の趣味、興味の赴くところ、つひには、どのやうな状態に立至るかをまざまざと示してゐるといふ点で、きはめて興味深いものを感じざるをえないのである。

最後に、トルコの「ラッカー (lake)」技術、この場合に即していふと「ワニス塗り」技術による表紙装釘について一言して、この小論の結びとしたい。水性塗料と金箔とを、木の板、皮革、厚紙などの材料に筆で施し、さらにその上へ「ワニス」を塗つて造つた「ラッカー」製品の最古のものは、今から五千年以前のエジプトの板の墳墓に見られる⁽¹⁾。この種の製品は、そのうち、中国で見られるのであるが、イラン地域に於ては、一五世紀のティムール支配時代になつてはじめて、知られてつくられはじめ、その最も美しい例は、この地方で一六世紀—一七世紀に装釘された表紙に見ることが出来る。しかし、この技術によつてつくられた製品がエジプトから極東へ、そして極東から西アジアへと、どのやうにして伝はつたのか、今のところまだ確実には明らかにされてゐないのである。トルコ民族に於ては、この技術による製品は、一七世紀の末以後、見られはじめた。トルコ民族は、イランから採り入れたこの技術によつて生み出した作品に於て、イランのものをそのまま模倣することなく、自らの芸術観、好みにびつたり合つたものをつくり出したのである。すなはち、イランの「ラッカー」技術による製品と、トルコのそれとをならべて比べてみると、技術は双方とも全く同じであるにも拘らず、模様のつけ方に於て大きい相異のあることに、ただちに気づくのである。

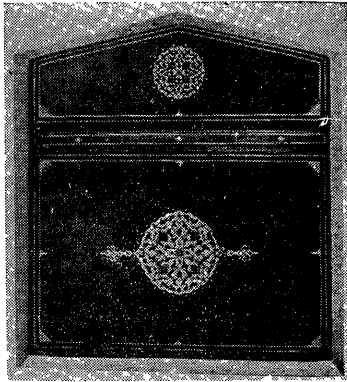
イラン地域で装釘された「ワニス塗り」表紙では、模様のモチーフとして、動物、人間、庭園や宮廷の風景、様式化されたモチーフが使はれてゐるのに対して、トルコのそれでは、はじめのうちは、ただ様式化された植物模様、花模様だけを用ひられ、一八世紀の末ごろから、その様式化されたモチーフとともに、写實的なモチーフが施されるやうになつたのである。第九図は、この技術によつて装釘された表紙の一例である。

以上私は、西アジアに於る表紙装釘の略史、それに使はれた技術、模様などについて述べ、さらに、オスマン時代のトルコの表紙装釘芸術の特長を、各世紀ごとに、特にその隣接するイランのそれと比較しつつ考へてきたのである。一般に「イ

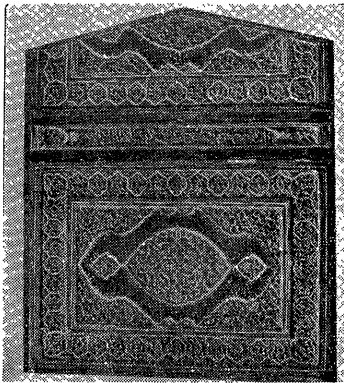
スラーム芸術」といはれるものに、共通した一つの特長があることはいふまでもないけれども、しかし、それを仔細に検討してみると、その中のいろんな民族、国家それぞれの芸術に、また各々固有、独特の性格がそなはつてゐることがわかるのである。このことを、「表紙装釘」といふ一芸術部門から考へてみようとしたのが、この小論であつて、これによつて、我々の敬愛して已まない日本の読者諸兄姉に、「西アジア表紙装釘芸術」一般の中に於る「トルコ表紙装釘芸術」の特殊性を、些かなりとも理解していただけたとするならば、私の幸、これにすぎるものはないのである。

(護 雅夫訳)

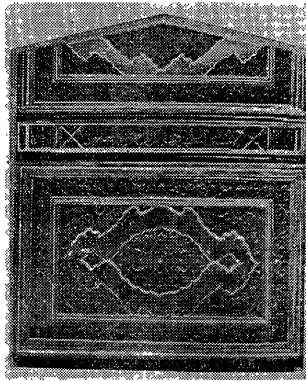
(イスタンブル、トプカプーサライ博物館副館長)



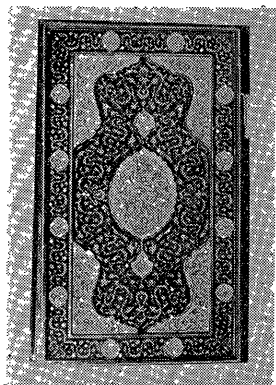
第一図



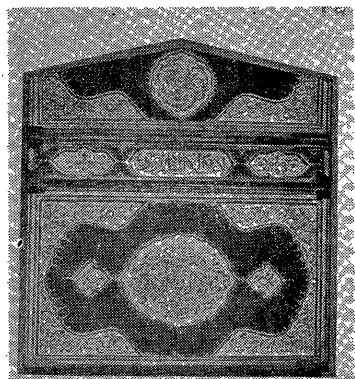
第二図



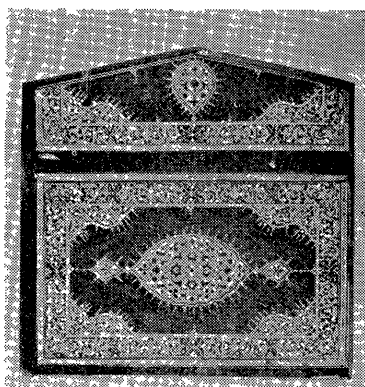
第三図



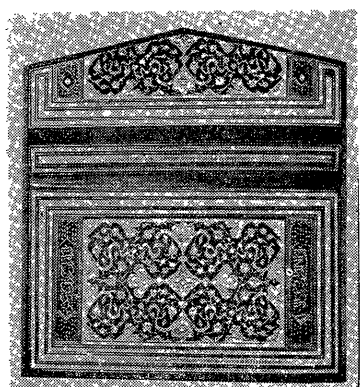
第 四 図



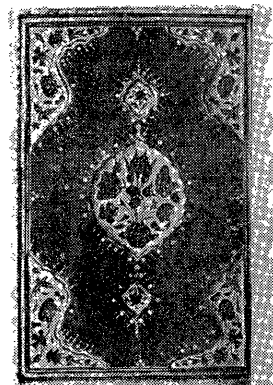
第 七 図



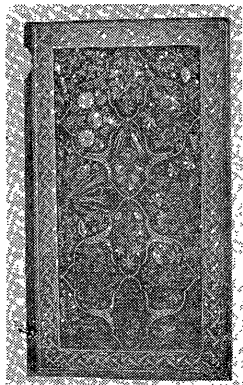
第 五 図



第 八 図



第 六 図



第 九 図

訳註

- (1) 本論は、昭和三五年五月十一日、東洋文庫主催東洋学講座の一つとして行はれた講演の草稿である。以下の訳註は、'Kenal Çağ, Türk Kitap Kâğıtları (Ankara Üniversitesi İlahiyat Fakültesi, Türk ve İslâm Sanatları Tarihi Enstitüsü Yayınları Sayı: 4), Ankara, 1953, c. 4, p. 1' ケマル・チネー「トルコの表紙」(アンカラ大学神学部、トルコ及びイスラーム芸術史研究所紀要、第四)の叙述中から、訳者が翻訳、転載したものである。
- (2) Sarre, F., *Islamische Bucheinbände*, Berlin, 1923.
Mehmet Ağaoğlu, *Persian Bookbindings of the fifteenth century*, Michigan, 1935.
- (3) Le Coq, A. von, *Chotscho, Archiv für Buchbinderei*, Berlin, 1913, X. Jahrgang, Heft III.
- (4) トプカプーサライ博物館、古書道室のアラビア書を陳列し

た中に、この種の表紙が一つ見られる。

- (5) みようばん、天然礬砂、煙草溶液など。
- (6) タフスィン・オズ (Tahsin Öz) 教授の、イスタンブル大学文学部に於る「トルコ芸術史」の講義ノート。
- (7) Celâl Esat, *L'Art Turc*, 1927, p. 274.
- (8) Ermenak Sakızyan, *Revue de l'art*, Paris, 1927.
- (9) Ali, Menakib-i Hünerveran, p. 73.
- (10) 例へばサーミ・オクヤイ (Sami Okyay) の作品など。ちなみに、サーミ・オクヤイは、その父、兄弟ともに、美術大学で東洋美術を講じてゐる芸術家一族に生れ、将来を囑目されてゐたが、若くして死んだ。
- (11) スハイル・ウンヴェル (Süheyl Ünver) 教授は、一九五一年、エジプトに旅行した際、カイロで、約五千年前の板の墳墓上に施された「ラッカー」製品を、大体五〇点見た旨を私に語った。